

# 明 柔

“95”世界選手権大会  
明柔関係特集

小川直也

吉田秀彦

秀島大介

園田隆一

阿武教子

明治大学柔道部明柔会会報

# 世界柔道選手権大会

柔道部会長 姿 節 雄



世界柔道選手権（男子第十九回、女子第九回）大会は、一九九五年九月二二十八日—十月一日の四日間、千葉市幕張で百ヵ国の参加を得て盛大に挙行され、柔道が全世界に普及発展したとの感を深くした。

第一回大会（一九五六年、東京（蔵前国技館））参加国21、第二回（一九五八年、東京（東京体育館））参加国18、第三回（一回は日本選手と外国選手との力量の差は明白で第一回は夏井選手が優勝、第二回は決戦で明柔同志の曾根、神永が対戦、曾根が優勝した。第三回は一九六一年、フランス（パリ）、参加国25、日本（曾根、神永）はオランダ（ヘーリング）に破れ、この頃より柔道が国際的になったと云われるようになった。

第一回から三回までは無差別級のみであったが、第四回（オランダ）は四階級、第五回から九回は六階級、第十回は中止、第十一回から十九回は八階級で挙行されるようになつた。第十九回日本開催は三十七ぶり、三回目であった。

世界柔道選手権大会で我が明柔選手の優勝は曾根（第二回）無差別に続き

須磨周司（重量）第六回、メキシコ、

篠巻政利（無差別）第六回、メキシコ、

川口孝夫（軽量）第七回、ドイツ、

上村春樹（無差別）第九回、オーストリア、

小川直也（無差別）第十五回、ドイツ、

”（無差別）（+95kg）第十六回、ユーゴスラビヤ、

”（無差別）第十七回、スペイン、

園田隆二（-60kg）第十八回、カナダ、

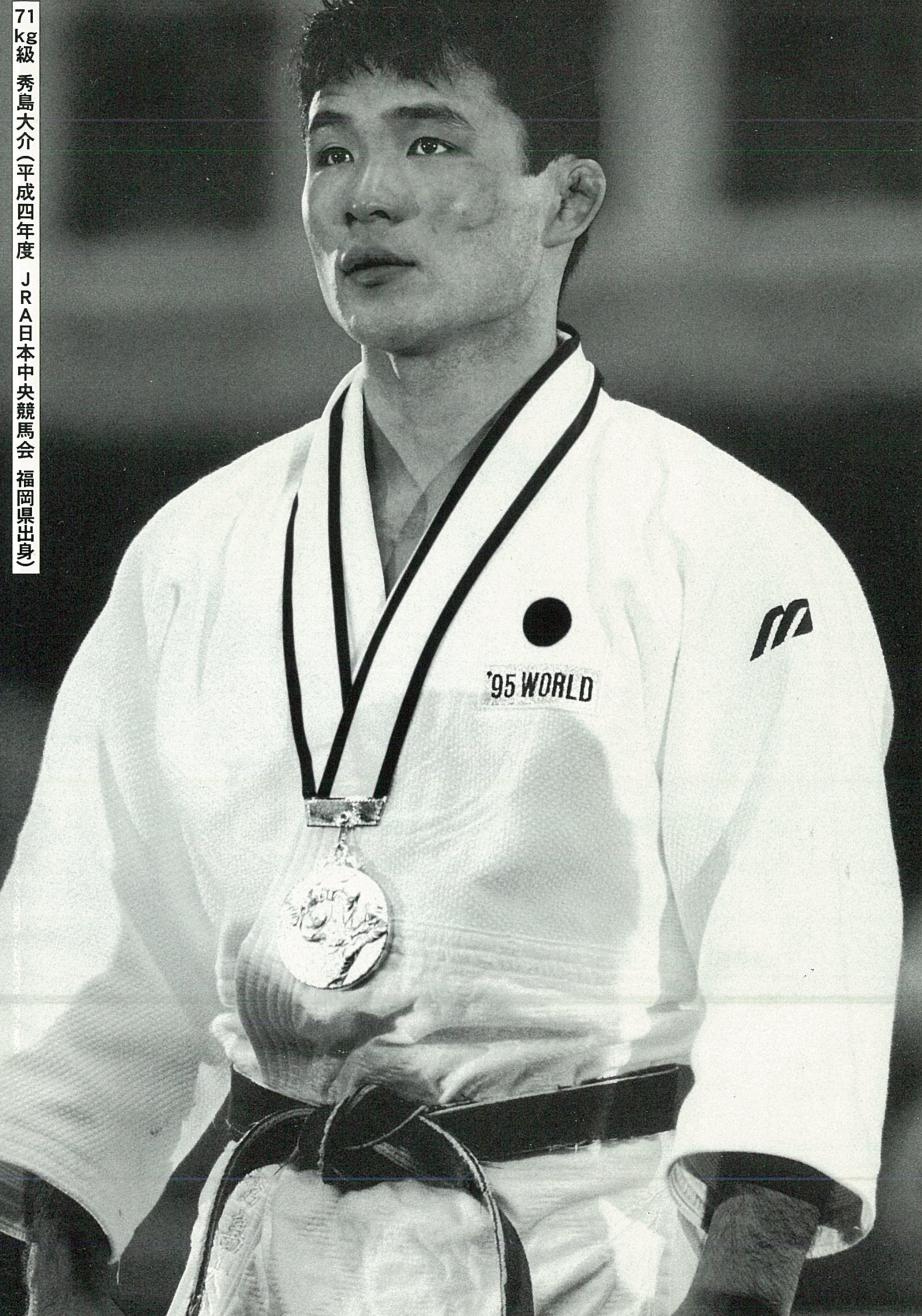
第十九回日本代表の明柔選手は小川（+95kg）、吉田（86kg）、秀島（71kg）、園田（60kg）の四名で日本代表八名中

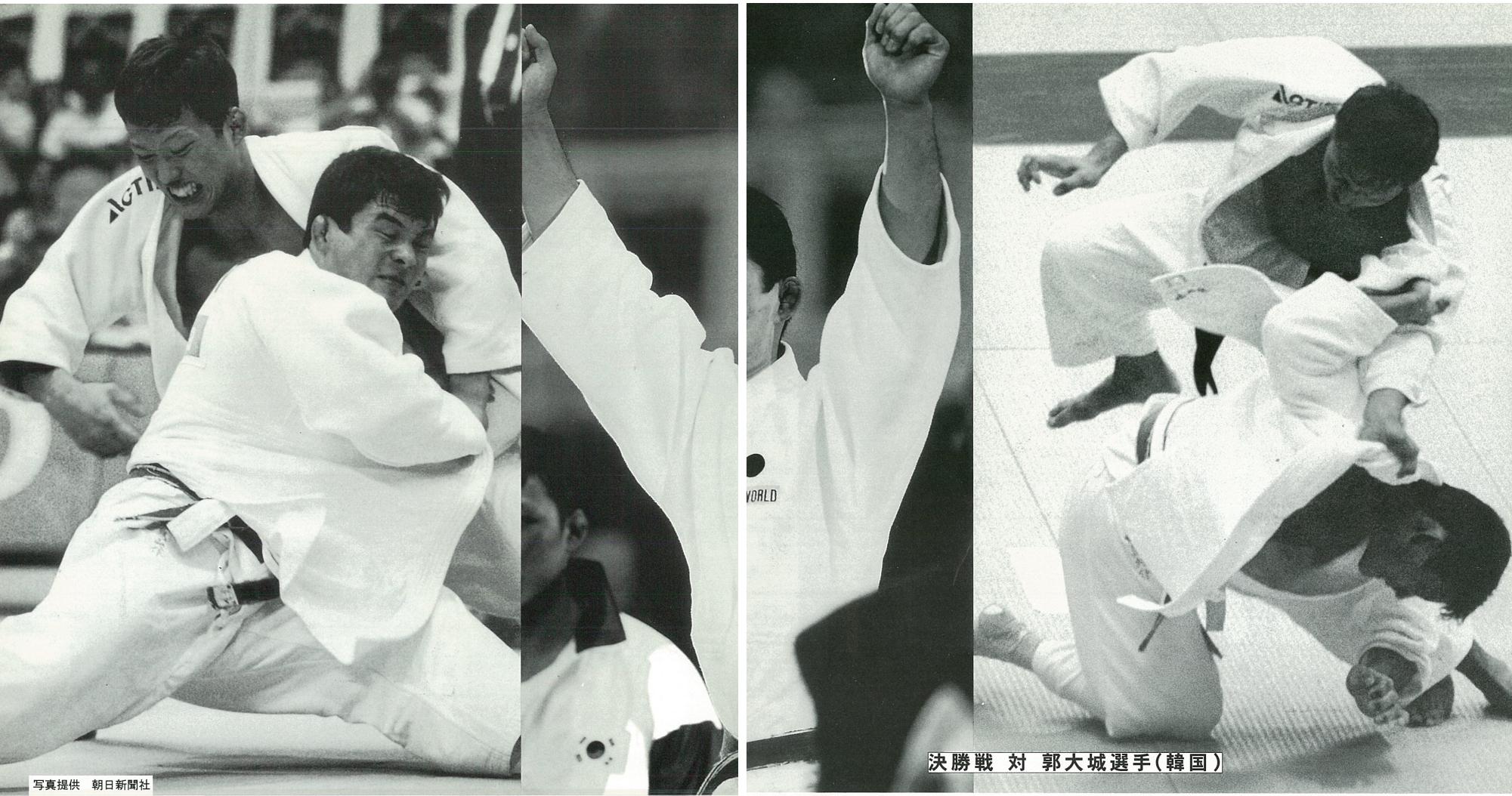
半数を占めたことは特筆すべきであったが、優勝は秀島だけで、私共の期待はずれとなつたことは残念であった。山下監督は今の日本選手には「精神的なたましまきが足りない」と云つているが私も同感だ。

女子大会では明大柔道部創部以来はじめての紅一点阿武選手が無差別、（72kg）超に出場よく健闘したが、二階級とも五位どまりであった。

阿武は体格差を克服し世界の頂点に立つためにはなお格段の精進が必要、日本女子柔道の水準高揚のため頑張ってほしいものだ。

## おめでとう、秀島大介 念願の金“





決勝戦 対 郭大城選手(韓国)

写真提供 朝日新聞社

「一勝大外」の多牟礼しかねに重きを浴びさせた。決勝までの三試合とも、得意の背投がかけられず苦戦を強いられる。しかし、韓国の新鋭、郭大城との決勝に臨んで「勝ちたい!」の積極姿勢に切りかわった。フッ切れたのだろう。

秀島は右背負投、左袖釣腰、右小内刈で再三相手を揺さぶり、序、中盤の主導権を握り、終盤、郭選手の猛攻を受けに回らすしのいで勝利をものにした。

一緊張感が持続しなかった」という郭に対し、秀島は執念でまさり、旺盛な闘志は最後まで衰えなかつた。接戦に根負けしない精神力には、練習の虫といわれた努力の裏打ちがある。

秀島の柔道は先輩の小川、吉田、後輩の園田に比べて表現力に乏しいといわれる。地味ということだ。しかし、今、そのいぶし銀が「金」に輝いた。

白旗が一本上ったのを確認すると涙があふれ出た。秀島大介は右腕で顔をぬぐい両手を膝にそろえて、一瞬瞑目した。

「腰、膝、首、肘と大学入学時からいつもどこかをいためており、完調で試合に出たことがなかった。しかし腕をいためると足腰を、下をいためると上半身を鍛えるといふことで練習を休んだことがない。大介は正に稽古の虫で、練習にブレークをかけた時もあった」と、原前監督が語る。

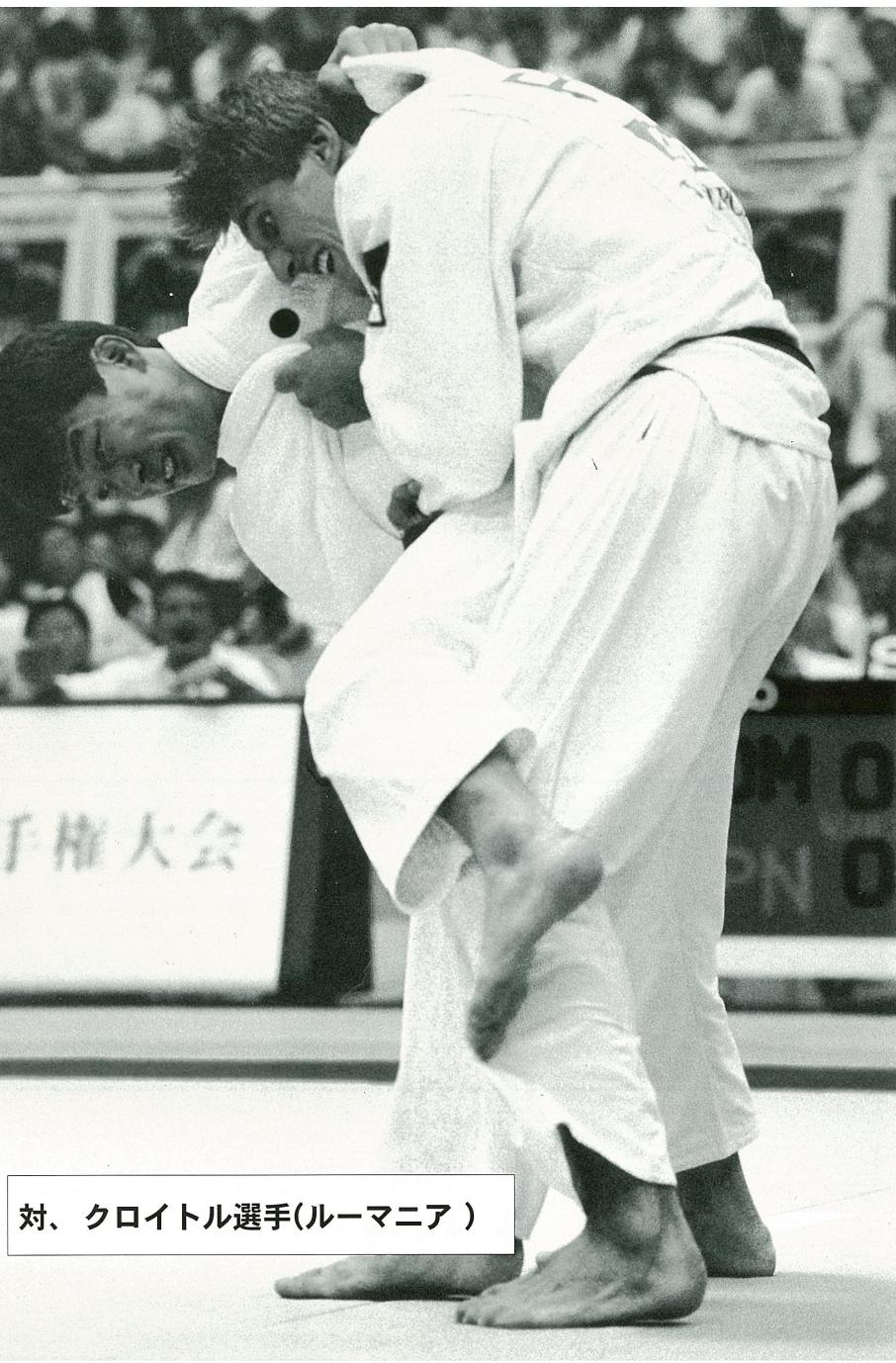
この日も大会直前の宿舎でいためたかかとに注射を打っての出場だったが、周囲には「体調十分こんなのは怪我に入らない」といつてのけての出場だった。

ひたむきな練習を積み重ねて代表権を獲得した地味な男、決して派手な勝ち方ではなかったが、体力のすべてを出し尽くして決めた世界の頂点だった。前回の世界選手権では三位、目ざすは金メダルしかなかった。だが、試合ではこ

## 「金」に いぶし銀が

# 吉田一瞬のスキ、決勝で涙

86kg級 平成二年年度新日本製鐵杯 愛知県出身



対、クロイトル選手(ルーマニア)

対、アリムジザノフ選手(ガザフスタン)



写真提供 朝日新聞社

きりする…」と意外とサバサバしていた。階級を二つ上げて挑んだ世界選手権はまさしくあと一步で届かなかった。

決勝の相手は前回の世界選手権七八kg級で決勝で対戦した全昌盈(韓国)。ともに階級を上げ、決勝対決の再現となった。前回、敗れてはいるが、棄権やむなしという腰の状態での試合だったこともあり吉田や有利というのが下馬評だった。

実際、序盤は吉田が攻めの態勢、全が徹底して両袖をしぼって防禦にまわった。しかし、三分近く全は一瞬をとらえ背負投から大外刈に変化、これをまともに受けた吉田をたたみに沈めた。「ビデオでの吉田研究が生きた」と全は語っている。

本大会にむけて吉田の体調は万全ではなかった。九月に入り下痢が止まらずつめた練習が出来ない状況を明大道場でもみな憂慮していた。

吉田は、「それをいったら言い訳になる体調を崩したのが原因ならば、それは自分の責任だ、相手の背負を警戒しきて单调な攻めしか出来なかつた、力不足です」と冷静に振り返り毅然とした態度で出直しを誓つた。

吉田秀彦二六才、彼もまた総決算をひかえている。

冷静を装いながらも歯を喰いしばった吉田の表情から、次は絶対勝つという男の決意を読みとった。

# 宿敵ハハレイシビを沈めるも!

小川、復活ならず銅

これまで小川に勝っている選手は世界に何人もいない。本大会そのうちの二人が小川のパートにいた。初戦、いきなりあのバルセロナオリンピックの決勝で苦杯をなめたハハレイシビリ(グルジア)と当る。当然期すものがあつただろう、小川は珍らしく闘志をむき出しにして飛びかかった。相手の奥襟をガバッとつかむと一分一〇秒、鮮やかな足車一本、この間ハハレイシビリは防禦一辺倒、一度負けている條原選手を一気に倒した。過日の全日本選手権パターンである。これほど力の差があるのでなぜバルセロナで——と思わず死んだ子の歳を数えてしまった。ともあれ因念の相手を下し波に乗った。



対、ハハレイシビリ選手(グルジア)

対、劉選手(中国)



95kg超級 小川直也 (平成元年度 JRA日本中央競馬会 東京都出身)

写真提供 朝日新聞社

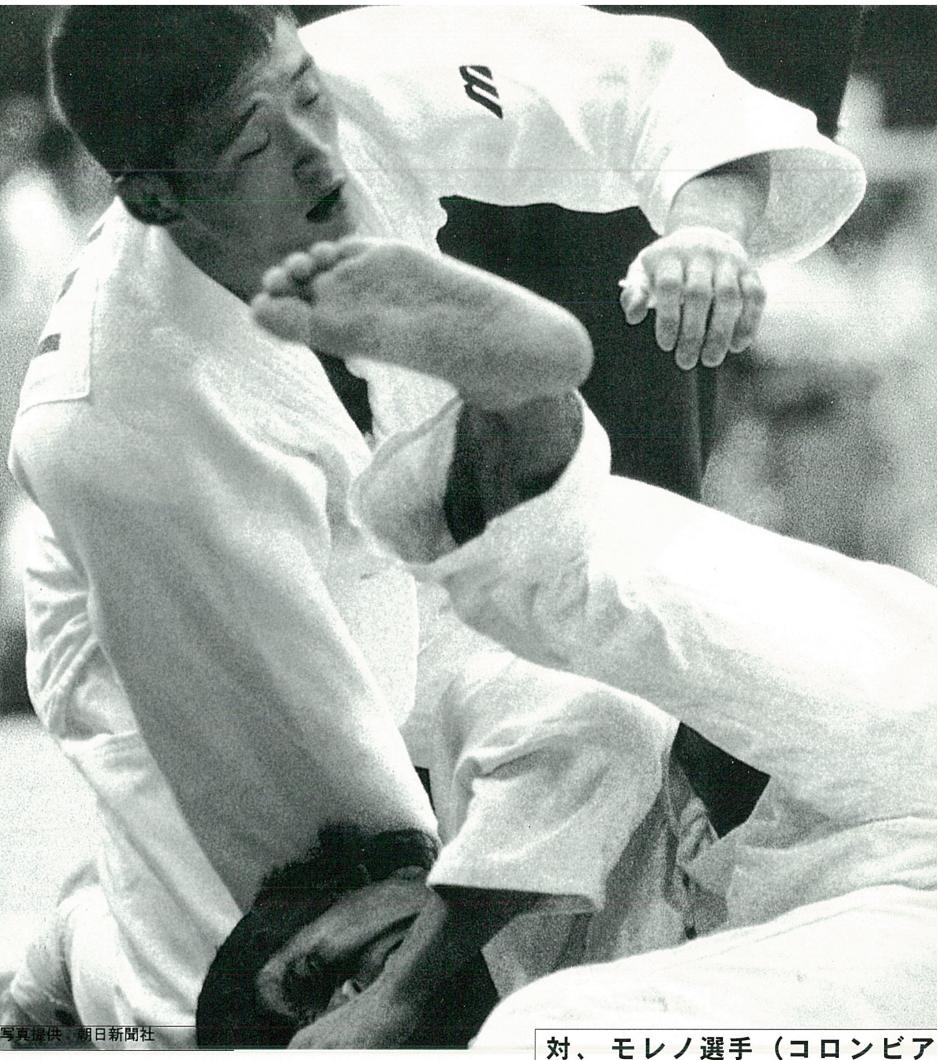
準決勝の相手はこれまで三回戦つて全勝のミュラー(ドイツ)である。勝利は疑いなしのムードだったが難敵をしのいで、分のいい相手に変ったためにできた心のエアポケットが王座奪回の道を閉じた。先の欧州遠征で研究されたのか「相手の組み手がうまかった」と小川はいうが、この準決勝小川が積極的に出たのは三分四一秒に有効をとられてから、しかし状況をかえるには時間が足りなかつた。

大会のスケジュールの関係で三回から準決勝まで約六時間の間があった。この間に集中力が途切れてしまつたといふことになるのだろうか、柔道に限らず大試合に臨む選手のメンタル面の葛藤は素人の想像を絶するものがあり、ペテラン小川でさえも一日に二度も気持ちを高めることができなかつたと思うしかない。

しかし何回も世界の頂点を見失つた強者がこの程度で自分を見失つてはなるまい。あのハハレイシビリ、バンバーネルベルト戦を見る限り小川の力は落ちているとは思えない。力は十分にある。奮起一番、アトランタでの総決算を待つ。

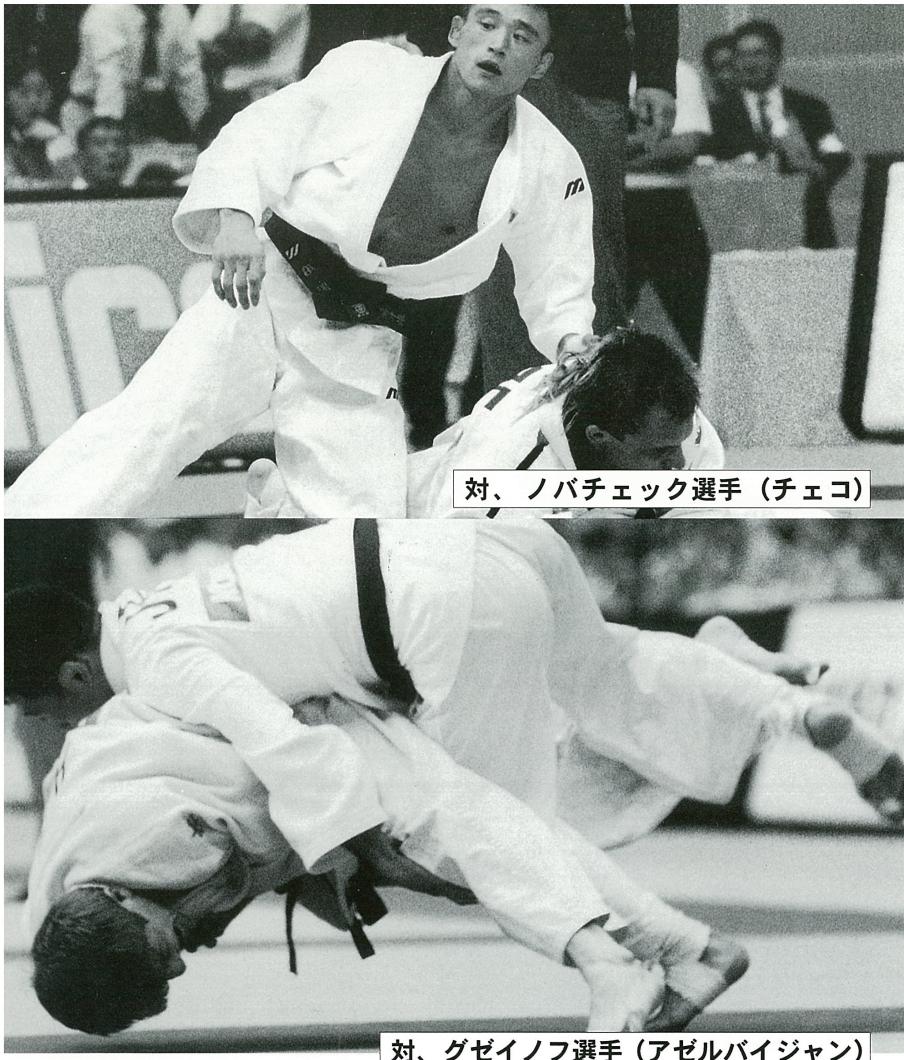
# 雪辱はアトランタで

60kg級  
園田 隆一  
(学生経営学部4年  
福岡県出身)



対、モレノ選手(コロンビア)

写真提供、朝日新聞社



対、ノバチェック選手(チェコ)

対、グゼイノフ選手(アゼルバイジャン)

## 前半たった の見すぎ

組み合せを見るとマークする選手は反対側のゾーンに多い。園田の決勝進出はほぼ確実と見た。

初戦でノバチェック(チェコ)を小刈技有り二本で何なく倒した時、この選手が相当な実力者だけに園田の動きから見てV2の予感が走った。二回戦ではモレノ(コロンビア)を絞技で、続くブセフ

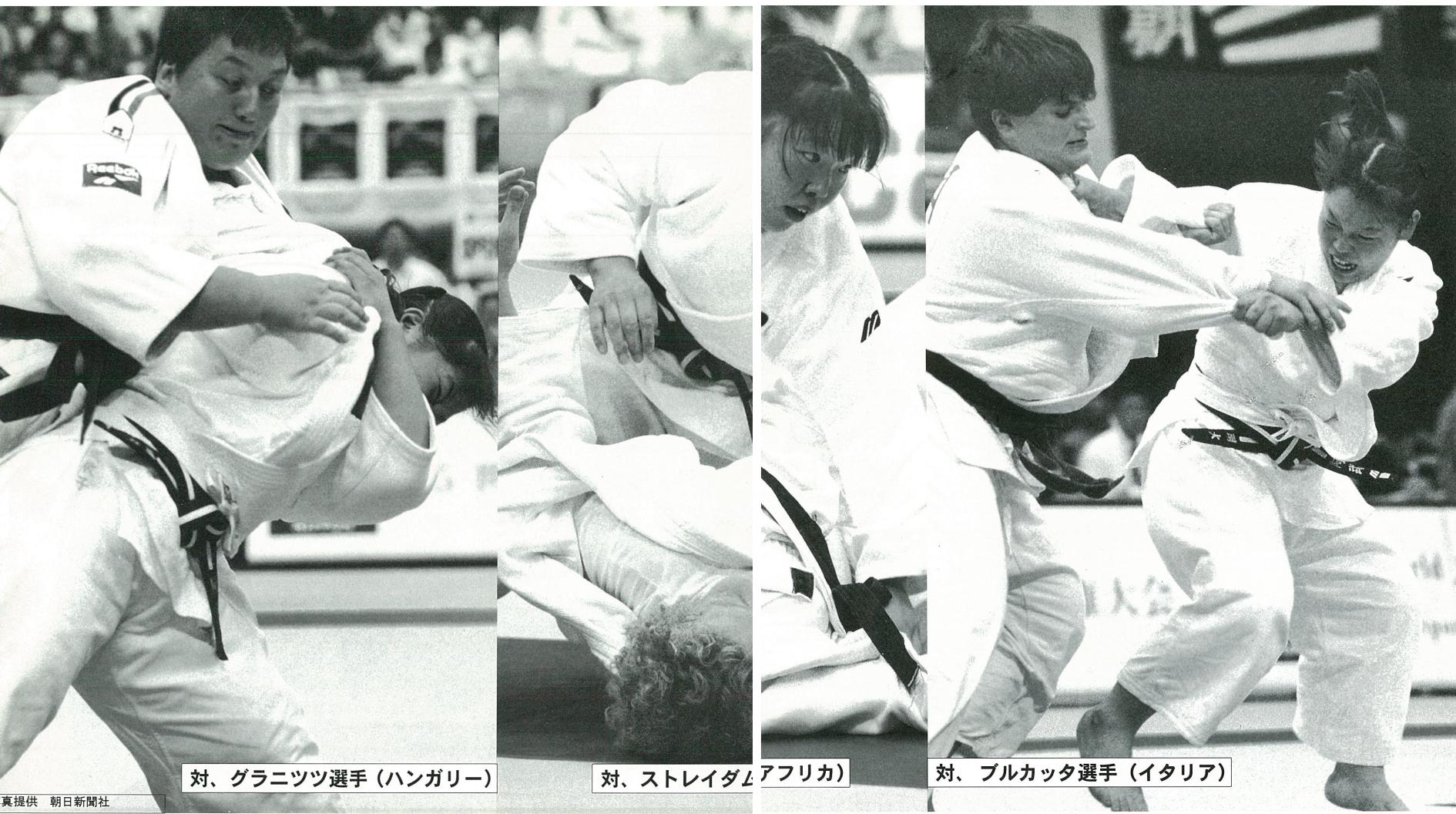
(ラルカリーノ)もまたよろくな付落しで決めた。金の期待は益々高まつた。

このブセフは担ぎ技と足技のコンビネーションがすぐれ腕力も強そうだが、園田の動きと組手はそれを上回っていた。表状も明るくV2のプレッシャーをすでにねのけたがに見えた。予想通り準決勝進出。

相手はオジョキン(ロシア)、リラウトマン(ドイツ)を緊迫した試合で下ろして上ってきた。

試合開始、双方指導の一一分手特有の腕力を生かした肩車で有効を先取、一瞬のスキをつかれた。その後は園田が一方的に攻め、オジョキンがポイントを守るという展開となる。三分四〇秒、守るオジョキンに注意が与えられたが結果園田は攻めきれず時間となり、まさかの敗戦となる。審判員のなかには、このような試合展開で相手に警告を与えるケースもあるのだが、この試合では最後までなし。三位決定戦で最初最も強敵といわれていたグゼイノフ(アゼルバイジャン)を有効二つから抜けさに下した園田の力を考えればかえすがえすもあの一瞬が悔まれる。優勝はそのオジョキン選手、つかみかけた金メダルが手中からボロリとこぼれた感じだった。無念しかし、大会が終った翌々日園

# 泣くな阿武、技では誰にも負けていない！



対、グラニツツ選手（ハンガリー）

対、ストレイダム  
アフリカ)

対、ブルカッタ選手（イタリア）

真提供 朝日新聞社

## アトランタ にむけて

二年前のハミルトンで「銀」におわり悔しい思いをした阿武。今回是非とも金を」と皆が期待した。

明治大学柔道部唯一の女子部員、連日男子部員と眦を決して稽古に励んでいる姿を見ているだけに我々の悪いも。入だ。

七八kg超級初戦コバチエビッチ（ユーロ）を裏で難なく制した時、夏のユニバーシアード大会にくらべてはるかによし、と見た。

しかし張穎（中国）の巨体のかべは余りにも厚かった。張は阿武のスピード豊かな攻めを恐れて徹底することが阿武の敗因となつた。通常体格差がある場合小さい方が組ませない戦法をとるのだが、この場合逆だから阿武は前には出るもの引き手がほとんどとれず足技で攻めることも、抱き技のチャンスもつかむことが出来ない。もちろん張も組まないからチャンスがない。最初から最後まで足とり戦法しかしこれが審判の心証を得たのか旗は張に上がった。

阿武は終始、前に出ていた。この結果をあえていえば余りにも違います。大きな相手にははつきりとした攻勢ポイントを示さなければ旗ではまず勝てない。大きい相手に張のような戦法に出られると阿武の体格では手の打ちようがない。殆どの選手が一〇〇kgを超える階級、七六kgの阿武にとって七二kg超級の線引きはいかにも厳しい。阿武の素晴らしさをフルに発揮できる階級があれば、としみじみ思った。

それでも阿武は一二〇kgのマキシモフ（ボーランド）など巨人選手相手の敗者復活戦に持ち味を發揮して二勝し三位決定戦に進む。しかしベルトラ（ギューバ）には背負のもどり際を大外きみに体をあすけられて有効を失つてしまふ。最後まで左右の背負投で攻め、動きつづける阿武に観客は惜しみない拍手を送ったが、結果は悔しい五位。

女子78kg級・無差別2階級  
阿武教子  
(学生 文学部1年 山口県出身)

# 巨人戦 一歩もひかず

阿武は最終日の無差別級戦でも三位決定で本大会女子選手で最も大きいロドリゲス(キューバ)を攻め場内をわかつたが、結果は二対一の旗判定で敗れた。ここでもメダルを逃してしまったが、ほどんど攻めず阿武の背負を巨体でつぶしただけのロドリゲスの勝ちに場内からブーイングが起こった程だ。

無差別級は最初から初日の雪辱を期して意欲的試合を見せた。この級も全員が大型ばかりだったが、一回戦ストレイダム(南ア)には大内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戦のグラニツ(ハンガリー)は早々に背負投技有り二つで合せ技。残念だったのは準決勝の孫(中国)戦、序盤でとられた内刈有効二つの後鮮やかに背負投一本。二回戻る

対、ロドリゲス選手(キューバ)

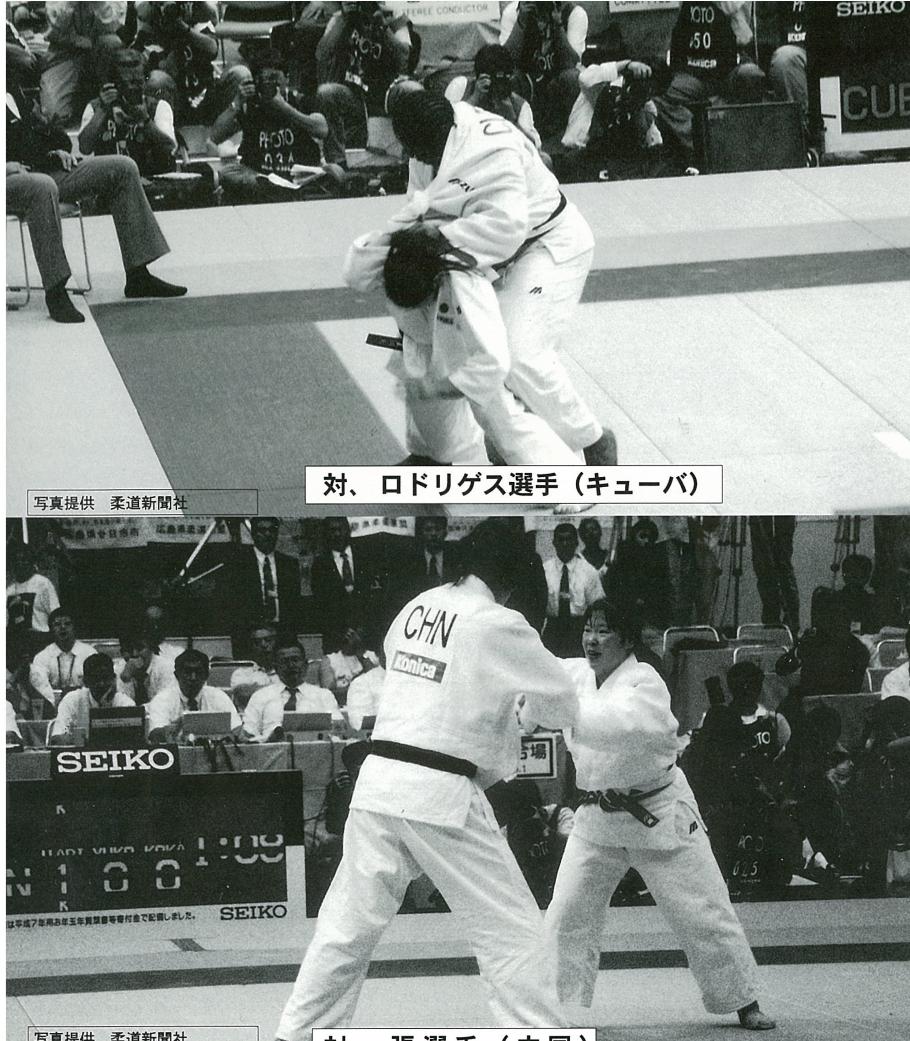
写真提供 柔道新聞社

写真提供 柔道新聞社

対、張選手(中国)

敗者復活でもブランディノ(ラジル)をあおって抱ぐ得意のリズムで一本勝。結局、両各級ともメダルにはとどかなかったが、各選手が徹底的に阿武の柔道を研究していたことも事実だ。

阿武の巻きかえしを期待してやまないが、技では誰にも負けていない。必ずトップに立てる選手であることを改めて実感した。



## 努力する者は報われる

部長

百瀬恵夫

人は眞面目にコツコツと努力すれば、努力した分だけ報われる、と先人から教えられてきた。報われたかどうかは、本人の価値基準によって判断が違ってくる。その基準は、自己の内面的な価値に基づくものと、対外的な評価によるものとの二つがあるようと思われる。

スポーツの世界においては、個人競技、団体競技のいかんを問わず、勝者負者によるランク付けで評価は明らかとなる。しかし、選手となって競技に出場する者はよいが、努力する人のお手本のような者であっても、一度も晴れの舞台に立てないままに終ってしまう人の方がむしろ多いのが現実である。

しかし、彼等にとっての唯一の確信は、人一倍努力してきた自我への満足感であり、研鑽に対する自己評価の誇りである。このような個々人の確信こそが、スポーツが人格形成、自己陶冶にとって最も重要な意義をもつのである。

名選手になる素質と努力の成果との双方を兼ね備えた人は、数字の上からはミクロの世界といえよう。

むしろ大方の者は、努力しても社会的基準からみると報われないだろう。しかし、そんなことはどうでもいいではないか。各々の人生にとって、人間形成の根幹を築く青春時代のスポーツ(柔道)こそ、掛け替えの無い報いとなるのである。

一般の世界柔道選手権大会で、七一kg級で金メダルを獲得した秀島大介君は、自他共に認める稽古虫であり、努力の塊りである。怪我に泣き、運に見放された時もしばしばあった。しかし彼の努力は見事に実を結んだのである。さらなる精進を重ねて、アトランタの星とならんことを切望して止まない。



# 明柔、五人の寸評



全柔連強化部長  
上村春樹

上村春樹

三七年ぶりの日本開催となった世界選手権大会は、九月二六日から四日間、千葉市幕張メッセイベントホールで開催され連日熱戦が展開された。大会史上最も多い百ヶ国、地域の参加を見た今大会は、会場施設や大会運営も史上最大の大会にふさわしくこれまで類を見ない模範的ともいえるものだった。

本大会は故神永昭夫先生が全日本柔道連盟専務理事の時代、日本柔道復活の目玉として強力に諸国に働きかけ、日本誘致にこぎつけたという経緯がある。我々関係者としては大会を成功させ、かつ一個でも多くの金メダルを獲得するべく、大会の準備と選手の強化に取り組んできた。しかし、結果的に日本柔道は急速に力を失ってきた世界の柔道の前に苦戦を強いられ、古賀、秀島、田村らが会場を沸かせたものの、金三、銀一、銅五と現在の階級になってからいえば大会史上最低の成績となってしまった。

さらに今大会は来年のオリンピックの出場枠（この出場枠は個人ではなく国に与えられるもので、本大会ベスト8は無条件、その他は各大陸で予選を改めて行う）のかかったオリンピックの予選の性格をもつ大会でもあった。したがって男子は全階級の出場枠をとったものの、女子は四八kg級を落とし、十月末のアジア選手権に四つの出場権をかけなければならなくなってしまった。

から、今後は組み手の多様化を一層図りどんなタイプでも組みとめ、間合いをとつて足技からかいていく阿武の型を完成させてほしい。

## 「八六kg超吉田」

二日目、八六kg級に階級を上げ、優勝候補の筆頭の吉田は、期待に応え決勝までバーフェクトといえる内容で勝ち進んだ。決勝は奇しくもハミルトンの世界選手権の七八kg級で決勝を争った韓国のジョン・ギ・オンであった。ハミルトンでの雪辱を吉田に期待したが、ジョン・ギ・オンの両袖を持っての背負投を棒立ちになって受けてしまったところを、大外刈に変化され、よもや一本負けを喫してしまった。

吉田は誰もが認める実力者であるが、この結果は夏からの体調不安が大きく影響したといえる。七月熊本合宿での足親指の骨折で一番大事な八月の練習が丸々出来ず、そのストレスからか大会直前まで下痢が続いた。この階級の外國勢には強豪が揃っており、いくら吉田でもベストの体調でなければどこでつかまってしまう。

最近の吉田はケガが多く、体調も崩しがちである。したがって以前のようにツメた稽古が出来ていない。技術的にはなんら問題はなく、またケガの間もウエイトトレーニングやランニングで気力、体力を保っているが、無事は名馬である。栄養面をはじめ体調の維持に気をばかり、万全の体調で練習に臨める状態を保持してもらいたい。学生時代大きなケガの少ない選手だけただにこの点特に心してもらいたい。

## 「七一kg・秀島」

三日目、一番苦戦が予想された秀島は、一回戦から肩に力が入り、仕掛けがおそらく必ずしも好調ではなかったが、どの試合でも組み負けず持ち前のしぶとい柔道に徹して意願の「金」をものにした。金メダリストにあえていえば秀島は体力も抜群で技のキレもあり、練習量の多さは誰もが認めるところである。問題は勝負を意識すぎて技が単発でおわるきらいがあること、今回はしぶとく勝ったが、同じ柔道では次回はきびしい。いうまでもなく世界の強豪が秀島をターゲットの一番として対策を練ってくるからである。

オリンピックに向けての技術的な課題は連絡技の充実のために技に入る時に瞬の力を抜くコツを身につけてほしい。これをものに出来た時、もう一つ

の課題である足技の多用にもつながるものと思う。連覇も夢ではない。

## 「女子七八kg超・無差別・阿武」

最終日に出場した、連覇をめざすチャンピオン園田は、難闘の減量もうまくいき試合内容は一回戦から快調だったといえる。しかし準決勝のオジヨキンの変則柔道を攻めきれず、逆に警戒していた筈の肩車で有効を失つて敗れた。

園田は軽量級にはめずらしく組んで勝負するタイプ。一本狙いの柔道である。したがって組み負けさえなければ連覇は間違いないと見ていたのだが、相手の変則技を警戒しきり、いい攻めが出はじめた時はすぐに時間がなかった。チャンピオンであっても力を出し切れない試合には勝てない。世界は甘くはない。

園田は日本の軽量級の中で奥襟をとつて攻められる数少ない選手である。この組手は技の連続に無理がなく攻めの幅がひろくなる。奥襟をとつての小外刈からの大外刈、内股、小内刈の攻めは實に強力で、この型が崩れさえしなければ、再び頂点に立てるものと確信している。

以上明柔五人の選手の戦いぶりと問題点について簡単に述べた。成績は秀島以外は不本意であったのだが、巻きかえしの最高の舞台が八ヶ月後にせまっている。

アトランタオリンピックを控えて彼らは依然として金メダルの有力候補であることは間違いない。日本中の期待がよせられている。死にものぐるいで残された期間を頑張ってほしい。

消化不良はもう願い下げである。強化委員会も今大会の反省を踏まえ、体制をより強化して捲土重来を期す所存である。



## 「九五kg超小川」

さて、本大会、明治大学柔道部関係者からOBの小川、吉田、秀島、現役学生の園田、阿武の五人が出場し、秀島「金」吉田「銀」小川、園田が「銅」、女子阿武が五位となった。初日に出場した九五kg超級の小川は慢性化した腰痛や膝の故障で調整に苦労したが、予選ではバルセロナオリンピックのチャンピオン、ハーレイ・シビリを足車で一発で仕留めるなど、ほぼ全盛期の小川を思わせる試合内容で勝ちあがった。

しかし、六時間の休憩のあととの準決勝では、モラーに対して集中力を欠き「有効」をうばわれて敗退した。私自身、小川の実力は依然として世界一と見ているが、最近は持病のために練習が出来ていないためか、集中力が途中でされてしまうくらいがある。心身完全の状態で臨めばまだ小川にかなう者はいない筈である。もし故障を完全に回復させることができないなら、その状態じょうずに付き合い、中・短期の練習目標を設定し、それに向けて集中した稽古を行なうべきだろう。漫然と練習量を重ねるだけでは不安である。是非来年のオリンピックに三冠達成をかけてもらいたい。

# 世界選手権での所感



監督重松裕之

先に千葉県幕張にて開催された世界柔道選手権には、わが明柔からO・B三名、学生2名が我が国代表として出場した。柔道の創始国である日本からの代表選手も他の国や地域と同様に一階級一名であることや、O・B三名も卒業以来学生時代と同様に駿河台道場で毎日汗を流していることを考へると、五名の代表選手を晴の舞台に送り出せたことは創部90周年の明大柔道部にとっても特筆すべき慶事であったと言つても過言ではなかろう。

しかしながら、戦績は決して満足出来るものではなかった。秀島が金、吉田が銀、小川と園田が銅、阿武は二階級で五位の成績は、選手達が各自精一杯戦った証でもあるが、約半年後に迫ったアトランタ五輪にむけて克服すべき多くの課題が浮き彫りになつた結果とも言えよう。もちろん、ここで言う「満足出来るものではなかつた」とは、柔道だから世界で勝つのは当然である（または金メダルではないと評価に値しない）と言つた現状認識に乏しい偏狭的に価値観からではなく、五名の選手全てが金メダルを獲得する実力を有していること、そして選手本人が誰よりも金メダルを欲しており、その為に多くのものを犠牲にしながら日々努力を重ねていることを知る一人として、戦績に満足していないことを付言しておきたい。

さて、ここでは現役学生として代表選手となつた園田と阿武の戦いぶりについて所感を述べることとした。60kg級に出場した園田は現在四年生で主将を務めており、前回カナダ・ハミルトンでの世界選手権では見事に金メダルを獲得している。同大会では文字どおりチャレンジャー精神に溢れた積極的な攻撃柔道を開拓することが出来たが、その後の各大会では減量苦と世界チャンピオンのプレッシャーから持ち前の攻撃力が影を潜め、守りに終始する場面が多く

なり芳しい成果を挙げることがなかなか出来ずに入った。しかし、年齢的に身体の発育期を終えて減量に対する意識付けやノウハウも蓄積されるのと相応して学生のリーダーとしての自覚も持つようになってからは徐々に本来の動きを取り戻し、決して楽ではなかった国内選考を勝ち抜き代表の座を獲得して連覇に挑むこととなつた。

当日の園田は減量も成功し、体調は万全と言えたが準決勝で伏兵と思われたロシアの選手に有効を奪われ敗れた。三位決定戦では前大会の決勝で逆転勝ちしたグルジア共和国のゲゼイノフ選手（バルセロナ五輪優勝者）に圧倒的な内容で一本勝ちしたことから判断してもこの日の園田の実力は間違いくくなバーワンであったと確信する。その選手を勝たせることか出来なかつた指導者として私の責任は大きいが、なかでも準決勝前に金メダルを意識して固くなつた園田に更なる動機付けが結果的に不十分であったことが悔やまれてならない。技術的には奥歴を取つての大技に磨きをかけつつ、低い勢態でもつれ合つた場合や膠着した場面での攻撃バターンの習得が望まれる。

いずれにしても、国内外に手強いライバルが多いことを自覚し、日々の体調管理は勿論のこと、如何なる場面でもチャレンジャー精神に裏打ちされた攻撃柔道を展開できるだけの稽古を重ねることが勝利への道である。

明大柔道部初の女子部員である阿武教子は72kg超級と無差別級の二階級に出場した。国内では第一人者であることは衆目の一致するところであり、前回のハミルトン大会では銀メダルを獲得していることから金メダルへの期待も高かつたが階級とも三位決定戦で惜敗し五位となつた。

阿武の持説は女子の重量級では希有と言えるスピードのある体裁きと技の正確度にあるが、それだけに阿武の倍近い体格で、阿武に対する研究を上から組み伏せて大技を仕掛け様とする相手は皆無であり、阿武の攻撃を待つてからの返し技か後ろへの動きに合わせての足技が多く、阿武に対する研究を積んでいることをうかがわせた。今後の課題としては、組み際から相手にプレッシャーを与えて阿武のスピード（崩し）に反応せざるを得ない状況を作りだすために足技に更なる磨きをかけ、僕に飛び込んでの小内・大内を自分のものにすることが望まれ、その為にはスピードを失わずに筋力のアップに努めることも肝要だと考える。

また、蛇足はあるが、たつた一人の女子であることで周囲も当人も必要以上に気配りがあったことは否めない。指導者、応援団が最大限の努力で阿武を育むことに変わりはないが、阿武自身も自らこの環境を自分の物にすべき能動的行動しなければならない。これがアトランタの一一番高い表彰台への不可避免の道であろう。教子ならそれが出来ると信じる。

## 大会を終えて

全日本柔道連盟  
事務局長

鳥海又五郎



おだやかな秋晴れの日、95世界柔道選手権大会が幕張メッセ、イベントホールで開幕し、四日間にわたって熱い戦がくり広げられた。参加国・地域一〇〇を数える史上最大のデリゲーション、実に三七年ぶりの日本開催である。入場式、各国の旗が続々と私の前を過ぎていく、瞬間、この大会の誘致に向けて日夜奔走されていたいまは亡き神永前専務理事の温顔が蘇つた。

会場は連日満員の盛況で事故もなく、大会は成功裡に終了した。

審判員（外国人）の技術向上などIJFが急務としてとり組まなければならぬ課題がいくつか残されたが、大会の運営に関していえば史上最大規模の大会にふさわしい運営がなされたと自負している。

とはいひいろいろあった。嘉納会長がIJF会長選舉に敗れたこと、また期待された日本チームの「金」が3で終わつたことなど。これらのこととは、ひと言で課題といふにはあまりにも重い。これに關してあるマスコミの記事を転載させていたたく（原文のまま）。「会長選に敗れたからといって日本の主張が敗れた訳ではないし、柔道の宗家が韓国に移つた訳でもない。世界の王者たちの多くは攻撃柔道に徹していたし素晴らしい技を見せてくれた。技をきめて勝つ柔道が出来なければチャンピオンになれないことを実証してくれた。」この見解こそが意を得たものである。最終日のパーティーでは勝者も敗者も国を超えた友情を確かめあい柔道人であることの喜びを満喫していた。

本大会にわが明柔から六名が出場した。出身大学の云々は立場上いうべきではなかろうが、母校の後輩たちの出場は正直いつつうれしい。彼らの戦評は上村君が別稿でやつてるので割愛するが、消化不良に終つた小川以下には是非とも捲土重來を期してもらいたい。アトランタが七ヶ月後にせまつてゐる。

思えば三七年前、東京体育館に若き日の曾根康治、神永昭夫両先輩の雄姿があつた。以来篠巻、須磨、川口、上村らから現役の小川、吉田、秀島、園田らまで世界選手権の大舞台にはいつも明柔の役者が顔をそろえてゐる。

明大道場は、まさに「柔道人生の牧場」である。学生諸君、先輩に統け！



神永昭夫 全柔連前専務理事

# 世界選手権所感

朝日新聞社  
運動部記者

## 竹園 隆浩



ている。しかし、優勝をつかんだ選手は、ほとんどががっちり相手を捕まえて、正確に「一本」を狙って技をかけていた。「組んでしまえば、日本の勝」という常識は、通用しなくなっていた。

ではなく、そういう事態を招いてしまったのか。一つは、先に書いたように外國勢のレベルが著しく伸びていて、当たるマークしていないう国の選手でも、日本人を破る可能性を持っている。現役の選手が弱くなった訳ではない。強くなつた外國勢の「力」を日本の関係者全員が、再認識すべきである。

もう一つは、国際ルールへの対応の中で、日本選手が自らの特徴を消して、外国人に似た柔道を目指すようになったことだ。確かに外國勢は組み手がうるさく、競り合いに強い。だが、体格的、筋力的に劣つてゐる日本人が同じ攻めをしても

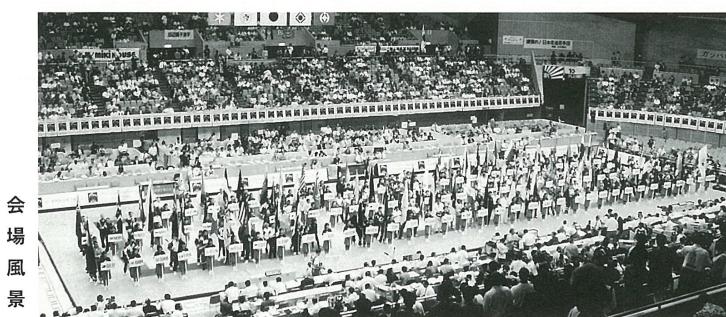
展開は有り利ではない。組み勝つても、先に技を仕掛けることは当然だが、そこで「一本取れる得意技」で勝負することをいつしか忘れてしまつていたのではないか。

三十七年ぶりの大会で得たものは、「教訓」ばかりだった。日本は国際化の波に乗り遅ながら、柔道本来の姿までも、見失おうとしていたのだから。柔道界は今後、この屈辱をバネに出来るか、それとも頑なに現状を維持しようとするだけなのか。九六年はアトランタ五輪、九七

今秋、三十七年ぶりに日本で開催された世界柔道選手権は、男子の体重別が導入されて以来、史上最低の金2個、女子も金1と、最も悪の成績に終わつた。地元の利を生かした柔道日本復活の起爆剤に、と考えられていた「祭典」は、直前に行われた国際柔道連盟（IJF）会長選手の惨敗とともに、柔道の国際化を強く印象付けた。

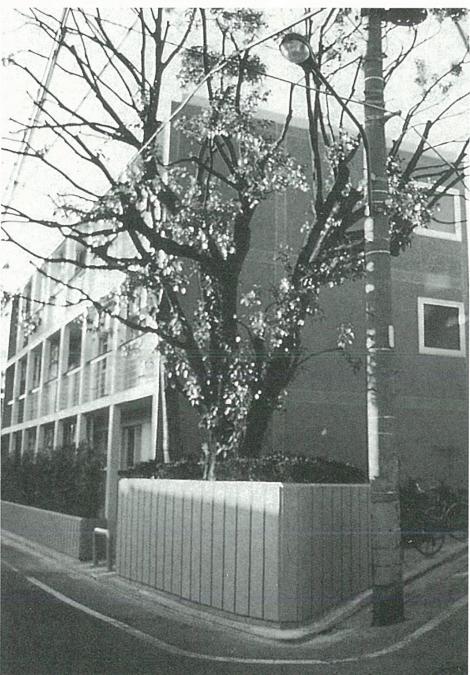
試合で目についたのが、外國勢のレベルの向上だ。日本人以外で初の男子95キロ超級、無差別級の二冠に輝いたダビッド・ドレイエ（フランス）や、韓国勢で優勝した男子86キロ級の全己盈、女子66キロ級の曹敏仙、同61キロ級の鄭成淑らは、まさしく正統派の攻めで世界の頂点をきわめた。これが、過去の五輪、世界選手権では、「実力では負けてない」と言ひ分が、敗れた時の日本柔道の救いだった。「一本取る気のない『逃げの柔道』」を守り抜いて、勝つ戦術が目立つた。

日本選手の方だった。確かに外國勢の多くは、昔と変わらない攻めをし



会場風景

年には、パリで世界選手権と国際大会は日本勢を立て直せるほど、状況は甘くない。日本柔道は今、崖っぷちに立つていて、



目黒合宿所竣工パーティ



秀島大介  
原前監督  
重松監督



## 1995. 世界柔道選手権祝勝会



全日本  
選手権  
皇后杯 阿武教子  
天皇杯 小川直也



部史上初の女子部員入部



喜こぶ師範、部長



武道館から明大道場に直行して祝杯を上げる  
OBたち



小川  
待望の笑み

# '95世界柔道選手権大会選手

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
5 1967 (昭和42)	アメリカ ソルトレーキシティー		軽量 (63kg)	重岡孝文 (大分県教育委員会)	松田博文 (関西大学)	金炳植 (韓国) ススリーン (ソ連)
			軽中量 (70kg)	湊谷弘 (天理大学)	朴吉淳 (韓国)	朴清三 (韓国=法大) 中谷雄英 (三菱レイヨン)
			中量 (80kg)	丸木英二 (丸木材木店)	ボクライエン (オランダ)	ジヤックス (イギリス) 遠盈信一 (東洋レーヨン)
			軽重量 (93kg)	佐藤宜践 (博報堂)	佐藤治 (倉敷レイヨン)	ヘルマン (西ドイツ) オイグスター (オランダ)
			重量 (93kg超)	ルスカ (オランダ)	前島延行 (三菱重工)	キクナーゼ (ソ連) 松阪猛 (大阪府警)
			無差別	松永満雄 (大阪府警)	グラーン (西ドイツ)	篠巻政利 (明治大学) ムラマン (西ドイツ)
6 1969 (昭和44)	メキシコ メキシコシティー		軽量 (63kg)	園田義雄 (日本運送)	野村豊和 (天理大学)	金相皓 (韓国) ススリーン (ソ連)
			軽中量 (70kg)	湊谷弘 (金沢工大教員)	河野義光 (自営)	ルドマン (ソ連) 七福 (韓国)
			中量 (80kg)	園田勇 (福岡工大)	平尾勝司 (佐世保北高校教員)	吳勝立 (韓国=天理大) ボグライエン (オランダ)
			軽重量 (93kg)	笠原富美雄 (神奈川県警)	ヘルマン (西ドイツ)	川端智幸 (大分県警) ボカタエフ (ソ連)
			重量 (93kg超)	須磨周司 (明治大学)	グラーン (西ドイツ)	松永満雄 (大阪府警) オナシビリ (ソ連)
			無差別	篠巻政利 (富士製鐵)	ルスカ (オランダ)	佐藤宜践 (東海大教員) オイグスター (オランダ)
7	1971 (昭和46)	西ドイツ ルドヴィスハーフェン	軽量 (63kg)	川口孝夫 (明治大学)	野村豊和 (天理大学)	ススリーン (ソ連) チョヨンサン 崔鐘三(韓国)

## 【男子】

95 <sup>+</sup> 級	超級	小川直也	(日本中央競馬会)
95 <sup>+</sup> 級	級	岡泉茂	(新日鉄)
86 <sup>+</sup> 級	級	吉田秀彦	(新日鉄)
78 <sup>+</sup> 級	級	古賀稔彦	(日本大教)
71 <sup>+</sup> 級	級	秀島大介	(日本中央競馬会)
65 <sup>+</sup> 級	級	中村行成	(旭化成)
60 <sup>+</sup> 級	級	園田隆二	(明大)
無差別級	級	篠原信一	(旭化成)

## 【女子】

72 <sup>+</sup> 級	超級	阿武教子	(明大)
72 <sup>+</sup> 級	級	田辺陽子	(ミキハウス)
66 <sup>+</sup> 級	級	石橋千里	(あさひ銀行)
61 <sup>+</sup> 級	級	恵本裕子	(住友海上火災)
56 <sup>+</sup> 級	級	溝口紀子	(埼玉大大学院)
52 <sup>+</sup> 級	級	數下めぐみ	(ミキハウス)
48 <sup>+</sup> 級	級	田村亮子	(帝京大)
無差別級	級	阿武教子	(明大)

## 世界選手権大会記録

(ゴジック表記は明治大学出身者)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
1	1956 (昭和31)	東京 藏前国技館	無差別	夏井昇吉 (秋田県警)	吉松義彦 (鹿児島県警)	ヘーシング (オランダ) クルティエヌ (フランス)
2	1958 (昭和33)	東京 東京体育館	無差別	曾根康治 (富士製鐵)	神永昭夫 (明治大学)	山舗公義 (京都府警) バリゼ (フランス)
3	1961 (昭和36)	フランス パリ	無差別	ヘーシング (オランダ)	曾根康治 (富士製鐵)	古賀武 (日本大学) 金義泰 (韓国=天理大学)
4 1965 (昭和40)	ブラジル リオデジャネイロ	軽量 (68kg)		松田博文 (関西大学)	湊谷弘 (天理大学)	ステファン (ソ連) 朴吉淳 (韓国)
				岡野功 (中央大学)	山中園一 (天理大学)	金義泰 (韓国) ブレグマン (アメリカ)
		中量 (80kg)		松永満雄 (高知県警)	坂口征二 (旭化成工業) ロジヤス (カナダ=拓大)	P.スネーデルス (オランダ) キクナーゼ (ソ連)
		重量 (80kg超)		ヘーシング (オランダ)	猪熊功 (警視庁)	キプロツチャビリ (ソ連)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
9	1975 (昭和50)	オーストリア ウィーン	中量 (80kg)	藤猪省三 (京都産業大教員)	原吉実 (新日本製鐵)	アダムチェック (ボーランド) コーシュ (フランス)
			軽重量 (93kg)	ルージュ (フランス)	石橋道紀 (日本大学)	ハルシラーゼ (ソ連) ベタノフ (ソ連)
			重量 (93kg超)	遠藤純男 (警視庁)	ノビコフ (ソ連)	高木長之助 (警視庁) パク・チョン・ギル (北朝鮮)
			無差別	上村春樹 (旭化成工業)	二宮和弘 (福岡県警)	チョチヨシビリ (ソ連) ローレンツ (東ドイツ)
10	1977 (昭和52)	スペイン バルセロナ	中止 IJF国際柔連加盟国台灣(中華民国)の入国をスペインが拒否したため。			
11	1979 (昭和54)	フランス パリ	60kg	レイ (フランス)	コ一 (韓国)	マリアニ (イタリア) 森脇保彦 (国士館大教員)
			65kg	ソロドーピン (ソ連)	デルバシ (フランス)	パブロフスキ (ボーランド) 佐原恭輔 (長崎県警)
			71kg	香月清人 (大阪府警)	ガンバ (イタリア)	アダムス (イギリス) ナムガラウリ (ソ連)
			78kg	藤猪省三 (京都産業大教育)	チュルヤン (フランス)	パクク (韓国) ハインケ (東ドイツ)
			86kg	ウルチ (東ドイツ)	サンチャエス (フランス)	高橋政男 (北海道警) カルモナ (ブラジル)
			95kg	フブルーリ (ソ連)	バンドワール (ベルギー)	ヌマン (オランダ) ノイロイター (西ドイツ)
			93kg超	山下泰裕 (東海大学)	ルージェエ (フランス)	チヨ一 (韓国) ペルガ (ユゴ)
			無差別	遠藤純男 (警視庁)	クズネツォフ (ソ連)	コバセビッチ (ユゴ) ルージエ (フランス)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
7	1971 (昭和46)	西ドイツ ルドヴィス ハーフェン	軽中量 (70kg)	津沢寿志 (正氣塾)	渋谷弘 (金沢工大教員)	ホットガー (東ドイツ) ザイコスキ (ボーランド)
			中量 (80kg)	藤猪省三 (天理大学)	重松義成 (明治大学)	オフレイ (フランス) スター・ブルック (イギリス)
			軽重量 (93kg)	笠原富美雄 (神奈川県警)	佐藤宜践 (東海大教員)	イシイ (ブラジル) ホウイラー (東ドイツ)
			重量 (93kg超)	ルスカ (オランダ)	岩田久和 (明治大学) レンフリ (イギリス)	グラーン (西ドイツ)
8	1973 (昭和48)	スイス ローザンヌ	無差別	篠巻政利 (新日鐵)	グズネツォフ (ソ連)	グラーン (西ドイツ) 閑根忍 (警視庁)
			軽量 (63kg)	南喜陽 (新日本製鐵)	川口孝夫 (丸善石油)	ロドリゲス (キューバ) ピケラウリ (ソ連)
			軽中量 (70kg)	野村豊和 (博報堂)	ヘトガー (東ドイツ)	ノビコス (ソ連) 吉村和郎 (日本大学)
			中量 (80kg)	藤猪省三 (クラレ)	園田勇 (福岡県警)	ライターロ (ボーランド) ツック (東ドイツ)
			軽重量 (93kg)	佐藤宜践 (東海大教員)	上口孝文 (警視庁)	スター・ブルック (イギリス) ローレンツ (東ドイツ)
			重量 (93kg超)	高木長之助 (警視庁)	ニジェラーゼ (ソ連)	ノビコフ (ソ連) レンフリ (イギリス)
9	1975 (昭和50)	オーストリア ウィーン	無差別	二宮和弘 (福岡県警)	上村春樹 (旭化成工業)	グラーン (西ドイツ) ツッケン・シュペルト (東ドイツ)
			軽量 (63kg)	南喜陽 (新日本製鐵)	柏崎克彦 (多賀高教員)	ピッヒラウリ (ソ連) マリアニ (イタリア)
			軽中量 (70kg)	ネフゾロフ (ソ連)	ドボイニコフ (ソ連)	秋本勝則 (拓殖大学) 藏本孝二 (神奈川県警)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
13	1983 (昭和58)	ソ連 モスクワ	95kg	ブレシェル (東ドイツ)	ディビセンコ (ソ連)	ノイロイター (西ドイツ) バンドワール (ベルギー)
			95kg超	山下泰裕 (東海大教員)	ウイルヘルム (オランダ)	シュテール (東ドイツ) シオク (ルーマニア)
			無差別	斎藤仁 (国士館大教員)	コツマン (チエコ)	オジュワル (ハンガリー) バンドワール (ベルギー)
14	1985 (昭和60)	韓国 ソウル	60kg	細川伸二 (長田商高教)	ユブケ (西ドイツ)	トレツエリ (ソ連) ブイコ (ハンガリー)
			65kg	ソコロフ (ソ連)	李環根 (韓国)	松岡義之 (兵庫県警) ゴーソープ (イギリス)
			71kg	安柄根 (韓国)	スウェイン (アメリカ)	シュトランツ (西ドイツ) ブルーチ (ポーランド)
			78kg	日蔭暢年 (岩手県警)	デンミゲン (東ドイツ)	アダムス (イギリス) シェスターク (ソ連)
			86kg	サイゼンバッハ (オーストリア)	ペトロフ (ブルガリア)	カヌ (フランス) ペスニャック (ソ連)
			95kg	須貝等 (新日本製鐵)	河亨柱 (韓国)	バンドワール (ベルギー) ノイロイター (西ドイツ)
			95kg超	趙容徹 (韓国)	斎藤仁 (国士館大教員)	ザブリアノフ (ブルガリア) ベリチエフ (ソ連)
			無差別	正木嘉美 (天理大研究生)	ラシュワン (エジプト)	ウイルヘルム (オランダ) ビクタシェフ (ソ連)
15	1987 (昭和62)	西ドイツ エッセン	60kg	金戴輝 (韓国)	細川伸二 (天理大教員)	ル一 (フランス) アサノ (アメリカ)
			65kg	山本洋祐 (日体大研究生)	ソコロフ (ソ連)	ブイコ (ハンガリー) パブロスキイ (ポーランド)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
12	1981 (昭和56)	オランダ マーストリヒト	60kg	森脇保彦 (国士館大教員)	ニクラエ (ルーマニア)	マリアニ (イタリア) タカシ (カナダ)
			65kg	柏崎克彦 (東海大付高教員)	ペトリコフ (チェコ)	ボノマリヨフ (ソ連) 黄正五 (韓国)
			71kg	朴鐘学 (韓国)	デイオ (フランス)	レーマン (東ドイツ) ブエビッシュ (ユーゴ)
			78kg	アダムス (イギリス)	加瀬次郎 (京葉瓦斯)	ペトロフ (ブルガリア) ドハティ (カナダ)
			86kg	チュルヤン (フランス)	野瀬清喜 (筑波大職員)	ウルチ (東ドイツ) ボタベリ (ソ連)
			95kg	ブルーリー (ソ連)	バンドワール (ベルギー)	バシヨン (フランス) 河亨柱 (韓国)
			95kg超	山下泰裕 (東海大大学院)	ベリチエフ (ソ連)	コツマン (チエコ) サローネン (フィンランド)
			無差別	山下泰裕 (東海大大学院)	レスキュコ (ポーランド)	オジュワル (ハンガリー) バンドワール (ベルギー)
13	1983 (昭和58)	ソ連 モスクワ	60kg	トルツエリ (ソ連)	ブイコ (ハンガリー)	原口謙一 (東海大一高教員) ストルベルグ (東ドイツ)
			65kg	ソロドーヒン (ソ連)	松岡義之 (兵庫県警)	パブロスキイ (ポーランド) ロサティイ (イタリア)
			71kg	中西英敏 (和歌山県教委員)	ガンバ (イタリア)	ナムガラウリ (ソ連) シュトランツ (西ドイツ)
			78kg	日蔭暢年 (岩手県警)	アダムス (イギリス)	ハバレーリ (ソ連) フラティイカ (ルーマニア)
			86kg	ウルチ (東ドイツ)	カヌー (フランス)	野瀬清喜 (埼玉大教員) バーランド (アメリカ)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
16	1989 (平成元)	ユーゴスラビア ベオグラード	無差別	小川直也 (明治大学)	ギボルトザリゼ (ソ連)	グローベン (西ドイツ) 金建秀 (韓国)
17	1991 (平成3)	スペイン バルセロナ	60kg	越野忠則 (東洋水産)	尹鉉 (韓国)	ブラディロール (フランス) グゼイノフ (ソ連)
			65kg	ケルマルツ (ドイツ)	大熊政彦 (東洋水産)	ペドロ (アメリカ) コスマニン (ソ連)
			71kg	古賀稔彦 (日本体育大学)	ルイス (スペイン)	鄭勲 (韓国) ジエボアーゼ (URSソ連)
			78kg	ラスコニー (FRGドイツ)	ラーテツ (ベルギー)	吉田秀彦 (明治大学) ワラエフ (RRSソ連)
			86kg	岡田弘隆 (マルナカ)	ワナン (アメリカ)	レジエン (ポーランド) ビスマラ (イタリア)
			95kg	トレノー (フランス)	ナツラ (ポーランド)	ソスナ (チェコスロバキア) メイリリン (ドイツ)
			95kg超	コソロトフ (URSソ連)	モレノ (キューバ)	小川直也 (日本中央競馬会) 金建秀 (韓国)
			無差別	小川直也 (日本中央競馬会)	ハハレイシビリ (URSソ連)	マソネ (フランス) チヨヌス (ハンガリー)
18	1993 (平成5)	カナダ ハミルトン	60kg	園田隆二 (明治大学)	グゼイノフ (アゼルバイジャン)	ワザガシビリ (グルジア) トラウトマン (ドイツ)
			65kg	中村行成 (東海大学)	ボルン (スイス)	ケルマルツ (ドイツ) コスマニン (ロシア)
			71kg	鄭勲 (韓国)	ハイトス (ハンガリー)	秀島大介 (日本中央競馬会) カルロッソ・サンパイオ (ブラジル)
			78kg	全己盈 (韓国)	吉田秀彦 (新日本製鐵)	ヤンジ (スペイン) クロアトル (ルーマニア)

回	年	開催地	階級	優勝	2位	3位
15	1987 (昭和62)	西ドイツ エッセン	71kg	スウェイン (アメリカ)	アレクサンドル (フランス)	古賀稔彦 (日本体育大学) ブルーウィン (イギリス)
			78kg	岡田弘隆 (筑波大学)	ワラエフ (ソ連)	李瀚 (韓国) レジエン (ポーランド)
			86kg	カヌヌ (フランス)	パク・ジョンチョル (北朝鮮)	村田正夫 (新日本製鐵) ホワイット (イギリス)
			95kg	須貝等 (新日本製鐵)	メイヤー (オランダ)	ミゲール (ブラジル) 河亨柱 (韓国)
			95kg	ベリチエフ (ソ連)	ラシュワン (エジプト)	ブライテ (西ドイツ) 徐国清 (中国)
			無差別	小川直也 (明治大学)	ゴードン (イギリス)	カストロ (キューバ) シユール (東ドイツ)
16	1989 (平成元)	ユーゴスラビア ベオグラード	60kg	トカシビリ (ソ連)	越野忠則 (東洋水産)	ダシュゴンビン (モンゴル) 尹鉉 (韓国)
			65kg	ペチャノビッチ (ユーゴスラビア)	ケルマルツ (東ドイツ)	コスマニン (ソ連) カラベッタ (フランス)
			71kg	古賀稔彦 (日本体育大学)	スウェイン (アメリカ)	リーナー (北朝鮮) テナーゼ (ソ連)
			78kg	金炳周 (韓国)	持田達人 (警視庁)	レシエン (ポーランド) ワラエフ (ソ連)
			86kg	カヌー兄 (フランス)	スピーカーズ (オランダ)	フロインデンベルク (西ドイツ) ローベンシュタイン (東ドイツ)
			95kg	クルタニーゼ (ソ連)	オドボギン (モンゴル)	メイリング (西ドイツ) バンデワール (ベルギー)
			95kg超	小川直也 (明治大学)	モレノ (キューバ)	クバツキ (ポーランド) ベリチエフ (ソ連)



# JOMO特約店

アスファルト・石油類総合販

## 株式会社 男鹿興業社

代表取締役社長 國 安 教 善

本 社 秋田県男鹿市船川港船川字埋立地1-18-2  
TEL (0185) 23 - 3293(代)

秋田営業所 秋田県秋田市横山川口境13-7  
TEL (0188) 35 - 3362



男鹿なまはげSS 男鹿市船川港船川字化世沢178 (0185) 24 - 3292  
鹿渡なまはげSS 山本郡琴丘町鹿渡字西小瀬川69 (0185) 87 - 2316  
千秋なまはげSS 秋田市千秋矢留町2-43 (0185) 34 - 1736  
牛島なまはげSS 秋田市仁井田栄町1-31 (0188) 39 - 2306  
広面なまはげSS 秋田市広面字谷地沖22-1 (0188) 32 - 7633

ステーキ & シーフード  
**バンフ**

秋田市山王1丁目6の7 淀ビル2F  
TEL 0188 - 62 - 7633

真心サービスで社員一同  
心からお待ちしております。

私の好きなものは  
この街にあります



# 広 告

## 中島畜産食品株式会社

代表取締役 中島 平人  
(昭和45年度卒)

本社 東京都墨田区太平1丁目6番8号  
〒130 TEL (03) 3625-4125(代)  
FAX (03) 3625-4132

多 彩 宝 庫

The ダイヤモンド

## 横浜地下街株式会社

横浜市西北幸一丁目1番8号  
〒220 (横浜東洋ビル)  
TEL 045 (316) 3132  
FAX 045 (316) 8722

## 小藤田整骨院

院長 小藤田 勝彦  
(S 40年度卒)  
東京都板橋区弥生町38-7  
TEL 03-3972-0055

豊かな心で、大きな未来へ。  
21世紀へ向って、着実に成長しています。

**KK** 株式会社 **キンショードー**

包装用品並びに梱包資材の製造加工

代表取締役 渡辺 欣嗣

本社・工場 東京都北区浮間3丁目5番28号  
〒115 電話 (03) 3984 - 9317(番外)  
FAX (03) 3967 - 9405(番)  
神田営業所 東京都千代田区三崎町2丁目21番10号  
〒101 電話 (03) 3262 - 4635(番)

紳士・婦人・子供  
各種

帽子のミヤシタ

(宮下光男 27年卒)

株式会社  
**村上工業**

代表取締役 村上光昭

〒272 千葉県市川市原木2393-3  
電話 0473(28)0979(代)

東京都葛飾区新小岩1-39-9  
新小岩銀座アーケード街  
電話 (3651) 0691

## 株式会社 旭モールディング

常務取締役  
福田 二朗  
(S 33年卒)

<プラスチックのご相談は当社まで>

本社・足立工場  
〒120 東京都足立区宮城1-3-25  
TEL 03 (3919) 3191(代)

## CK 第一企業中央株式会社

[系列会社]  
第一企業管財株式会社  
箱崎興産株式会社

代表取締役 細川 隆夫  
(38年度卒)

ビル総合管理  
清掃、警備、電気、機械  
その他ビル管理一式

泉屋の

かみいのく  
泉屋の味

おりつづけて50年 お好みの総合メーカー

株式会社 泉屋製菓本舗  
名古屋

「33年度卒 伊藤彰朗」

〒105 東京都港区浜松町2丁目3番25号  
マスクビル7F  
電話 03-3578-8123(代)



**MEIJI UNV. JUDO CLUB  
PERIODICALS**